まちづくり研究センター報告書
2022年度

文京学院大学

巻頭挨拶

まちづくり研究センター長　古市 太郎（本郷）
副センター長　中山 智晴（ふじみ野）

2019 年 4 月、本郷・ふじみ野キャンパスに開所しました「まちづくり研究センター（通称：まちラボ）」は、産官学民の連携による新たな社会創造を目的に学生と教職員も一丸となりまちづくり活動を展開しています。地域の様々な主体の方々に多大なる協力をいただきまして、ここまで地域活動を広げられてきたことに大変感謝をしています。

本郷キャンパスでの活動は、主としてまちづくりを学ぶ授業を通して実施されています。地域文化・伝統の保存と継承、地域住民の健康維持・居場所づくり、芸術や社会貢献を通じた地域交流の場づくりなど､授業に留まらない地域実践活動を通してまちづくりに貢献しています｡ふじみ野キャンパスは授業ではなく全てがボランティア活動です。市役所、NPO、中学・高校や商店会などと連携し、明るく住みやすいまちづくりに向け、多世代の方々が交流し、皆で夢のある将来を語り合い創造する場を提供してきました。その成果の一部は既に地域に還元され、異世代の交流の場などが作られています。

学生にとって、まちラボの活動に参加することは通常の教室での授業とは異なり、実際に様々な人々と出会い、語り合い、そして夢の一部を実現させるために協働し、さらには成果を社会に還元する段階まで体験するため､大変ではありますがとても重要な経験をしています｡世代を超えた方々とのコミュニケーション力、企画立案能力、地域課題の発掘能力などを地域の方々のお力を借り学ぶ良い機会となっています。

まちラボは人と人が集まり語り、課題を共有し、その解決に向け力を合わせ行動する点に素晴らしさがありますが、この 3 年近く、新型コロナ感染症の流行により交流活動が大きく制限されてきました。学生もやりたいことは多々ある中で、その多くが制限されています。しかし、そのような環境下でも得意のソーシャルメディアを活用する方法を含め、制限下での高齢者や子どもとの交流方法など彼らなりに新たな手段を生み出しているようです。

最後となりますが、今年度の活動成果をこの報告書にまとめ、お世話になりました皆様方にお届けいたします。是非一読され、皆が夢を語り合うまちづくり活動を共に推進させていきたいと願っております。

今後とも、よろしくお願いいたします。

目　次

「分業（division）と分担（sharing）」とは …… 1
「まちラボ」とは …… 3
■まちラボプロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ …… 5
1．芸術のマーケティング …… 6
2．「スポーツ」があるまちづくり …… 7
3．文京まちあるきコースづくり …… 8
4．「子どもの貧困」―動坂テラスとの連携を通じて― …… 9
5．キャンパスエコロジープロジェクト　― ペットボトル削減化の推進 ― …… 10
6．都市における日常の小さなサードプレイス …… 11
7．ねこっちさんビデオ通信～文京 Deep な人 …… 12
■まちラボプロジェクト実習Ⅰ・Ⅱ …… 13
1．大学生の意識向上のための環境教育の推進を目指して
―ビーチクリーン活動を通した海洋プラスチックごみの削減化を例に― …… 14
2．地域の居場所「こまじいのうち」は地域社会でどのような機能を果たしているか 15
3．赤羽中央街商店街魅力探究プロジェクト―ビジュアルブック作成を通じて― …… 16
■まちラボ研究活動・地域活動 …… 17
1．文京区学生支援担当者連絡会議（通称：地域ニーズの会） …… 18
2．地域と繋がる掲示板 …… 19
3．Sorting Art（分別アート）プロジェクト …… 20
4．コスメバンクプロジェクト in 文京学院大学 …… 21
5．ぶんぶん新聞 …… 22
6．移動式屋台を活用した日常の小さなサードプレイスプロジェクト …… 23
7．地域の障害者就労支援施設でのインターンシップ・プログラム開発 …… 24
8．ふじみ野昭和アルバム（「都市化と地域社会」研究会）…… 25
9．ふじみ野学生ミーティング報告 …… 26
まちラボカレンダー（2022 年度　まちラボ本郷の活用状況） …… 27

「分業（division）と分担（sharing）」とは

まちづくり研究センター長
古市 太郎

「社会の存在しているあらゆるところには常に連帯が存在しているのであるから、そこには愛他主義が存在しているのである」（デュルケーム 1893 = 1989：322（上））

自分がゼミや演習のオープニングで、学生に確認する事項がいくつかあります。恥ずかしながら、ひとつ紹介しようと思います。それは「分業と分担」の違いです。ネタ元は、フランス社会学者エミール・デュルケーム『社会分業論』(1893) です。私なりに解釈して、以下のような話をしています。

飲食のアルバイトの例です。A さんはキッチン、B さんはホール、C さんは会計、D さんはリーダー……、それぞれが各自の業務を遂行する。まさに division、仕事が分割されています。各自がいろいろな業務を兼務すると、混乱をきたし効率性が減じるため、業務を分割して、仕事の効率性をあげます。それが分業の目的です。あるいは、各自業務が終われば、本日の仕事からあがってもいいかもしれません。

他方、「分担」の方はどうでしょうか。A さんはキッチン、B さんはホール、C さんは会計、D さんはリーダー……、各自がそれぞれの業務を遂行する。そして、各自、業務が終わったなら、「A さん、手伝おうか？」という掛け声に現れるように、自分以外の業務を手伝うというものです。分担の目的は、各自が業務で分割されながらも、その分割されている間（業務間）をつなげていくというものです。

もちろん、こうした説明から、「だから、ゼミ生の皆さん、お互いの業務や役割が終わったら、そこで終わりではなく、お互い声かけて分担していきましょう」という話をします。

しかし、時間をかけたいのは、次の問いからです。「なぜ、分担が可能なのか」、「なぜ分かち合えるのでしょうか」という問いです。例えば、A さん、B さん、C さん、D さんは地元がそれぞれ違い、また A さん B さんは大学生、C さんは高校生、D さんは主婦であり、地域も世代も異なる中で、なぜ分かち合えることができるのか。

各個人に備わる素質からでしょうか。個人にそうした助け合う性向がそもそも備わっているから、また、A さんは C さんに好意を抱いているからなど、各人ひとりひとりの性向、感情、意見といった「個人的なもの」からという理由だけで、「その場において」皆が助け合うことについて、説明することはなかなか難しいです。事後的な分析は可能でありますが。

また、学校教育機関で一方向的に教わったからでもないと考えられます。つまり、「教科書的なもの」があって、一律に教えられ、それを各自がインプットして「こう書いてあったから、こうした」というマニュアルから機械的にうまれるものでもありません。一律に埋め込まれたものを機械的にアウトプットするとしたなら、状況に応じた臨機応変な分担は難しいのではないでしょうか。

その解答については、学生がうまく表現してくれています。「それ、モラル（morale）でしょ」。まさに、これです。

さて。授業の方では、この分担を支えるモラル、つまり「言語化は難しいが感覚的に共有されているもの」を開示し言語化し合います。言語化がうまくできないが皆が「自然と共有しているもの」とは何なのか。それを知り共有するプロセスが大事であるからです。そして、こうした問いを、現代社会の諸問題へと向け直すのです。

効率性をはかる分業と連帯をはかる分担。そして、その先あるいは手前にある「連帯を支えるもの」への問い。こうした問いは、学生にとって、「分断が色濃く出ている現代社会」に対して「読み解く知」へのひとつの契機となるのではないでしょうか。

【参考文献】Émile Durkheim, 1983, *De la division du travail social.*
（＝井伊玄太郎訳 1989『社会学分業論（上）』講談社学術文庫）

「まちラボ」とは

●「まちラボ」の理念と目的

「まちラボ」とは、「まちづくり研究センター」（英語表記はSocial Design Center）の略で、本学の建学の精神「自立と共生」に基づく共生社会の構築を目指す「実験空間」である。この空間は、本学人間学部 コミュニケーション社会学科の基盤となる教育理念を備えた「教育・研究の場（研究所）」でもある。教育は、授業、地域で展開するゼミの課外活動や地域のボランティア活動の中で展開され、教員が中心となる研究活動へと発展していく。

「まちラボ」では、社会課題、とくに社会的「距離・不平等・格差」に対し、共生社会の構築に向けた国内外での社会貢献型プロジェクトの企画・運営を、学生が主体的に「産・官・学・民」の体制から取り組み、成果を社会に還元していくことを目指す。

まちづくり研究センター概念図

●「まちラボ」の活動

「まちづくり研究センター（まちラボ）」は、2019 年 4 月、社会の課題に取り組む産官学民連携型学習を活発化するために開設された。

本郷・ふじみ野両キャンパスに拠点があり、ふじみ野では郊外型（1-2 年生）、本郷では都市型（3-4 年生）の社会問題をテーマに取り組む。学生たちは、キャンパス内だけでは見えてこない実社会の課題に対し、地域や企業、行政の方々と協働しながら取り組んでいくのである。ふじみ野キャンパスでは、ボランティアとしての活動を通じて、課題解決に向けた基礎力であるコミュニケーション能力、チーム力などの育成強化を図る。

本郷キャンパスでは、まちラボプロジェクト演習、まちラボプロジェクト実習というプロジェクト型学習を軸に、多様なテーマから課題を選び、理論と実践を相互に学習しながら、新たな社会の形成に必要な仕組みを創造する力を養っていく。

まちラボ本郷は、赤いロゴがガラス扉に大きく描かれた、カフェのような内装の部屋である。この部屋を授業、ゼミ、イベント等での利用だけでなく、空き時間や昼休みの休憩場所として利用する学生が増えてきた。定期的に顔を出す学生も多い。学内でのちょっとした打合せや、体験の場としても活用される学内の居場所、サードプレイスなのである。大学見学の高校生には「こう見えて授業中」と説明するが、学生どうしが自発的に話し合う様子を見ているうちに、高校生の表情が輝く瞬間があった。

「統計の授業」でまちラボを使用

石村 友二郎先生

まちラボでは、PC を利用した授業も行われます。まちラボならではの自然素材を活かしたインテリアや、周りとのコミュニケーションが取りやすい教室環境は、仲間とカフェやおしゃれな会議室で仕事をしているような感覚で授業を受けることができます。

コミュニケーションが取りやすい教室環境

● 3 つのタイプのまちラボプロジェクト

まちラボのプロジェクトには、単位化されるものと自主的なもの、本郷を拠点とするもの、ふじみ野を拠点とするものがある。自主的な地域活動プロジェクトには、活動プロジェクトと研究プロジェクトがあり、教員が中心となって提案された企画に運営委員会からの承認を受け、始動する。

2022 年度は、新型コロナの自粛傾向が弱まり、学生が中心となる活動が見られ始めた。

3 つのタイプのプロジェクト概要と掲載ページ

① 授業プロジェクト（単位化）➡ p.5 ～ 16

授業プロジェクトは、コミュニケーション社会学科 3 年生必修のまちラボプロジェクト演習、4 年次に卒論の代わりに合同報告書にまとめるまちラボプロジェクト実習がある。いずれも 10 人前後の少人数で行われる実践的なプロジェクト学習となる。今年度は、授業内活動の中にも地域で展開するイベントが増えてきた。また、まちラボプロジェクト演習については、地域情報紙「湯島本郷マーチング通信」にて、担当教員のリレー式コラムが連載された。

② 本郷で展開する地域活動プロジェクト（ボランティア）➡ p.17 ～ 21

新型コロナの地域活動への影響に悩む文京区内他大学との連携プロジェクト、報告会＆交流会、コスメバンクプロジェクト等があり、環境教育や掲示板活用も活動の一部としている。

③ ふじみ野で展開する地域活動プロジェクト（ボランティア）➡ p.22 ～ 26

大井亀久保地域の生活をモチーフとし、人材や写真記録などを掘り起こして交流へとつなげるワークショップや新聞発行、障がい者福祉関連プロジェクトなどがあり、今年度は、ふじみ野市内のあちこちで、３年前に制作した屋台を活用した学生たちの活動が見られた。

まちづくり研究センター 担当教職員

■まちラボ本郷運営委員会

センター長：人間学部コミュニケーション社会学科　古市太郎
運営委員：経営学部　新田都志子　外国語学部　赤松淳子　人間学部人間福祉学科　青木通
アドバイザー：島田昌和 理事長　研究員：森下英美子　事務担当：滝川多美

■まちラボふじみ野運営委員会

副センター長：人間学部コミュニケーション社会学科　中山智晴
運営委員：児童発達学科　菖蒲澤侑　人間福祉学科　田嶋英行　武田和久
心理学科　文野洋　コミュニケーション社会学科　岩舘豊
研究員：栗原真史　事務担当：渋谷由佳

まちラボプロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ

人間学部コミュニケーション社会学科３年生の必修授業。
地域社会を教育・研究のフィールドと捉え、
社会問題解決へ向けての地域再生の要となるプランナーや
コーディネーターの能力を有する人材の育成を目的としている。

プロジェクト演習 報告書１
芸術のマーケティング（島田・小西プロジェクト）

プロジェクト演習 報告書２
「スポーツ」があるまちづくり（青木プロジェクト）

プロジェクト演習 報告書３
文京まちあるきコースづくり（貫井プロジェクト）

プロジェクト演習 報告書４
「子どもの貧困」―動坂テラスとの連携を通じて―（古市プロジェクト）

プロジェクト演習 報告書５
キャンパスエコロジープロジェクト　―ペットボトル削減化の推進―（中山プロジェクト）

プロジェクト演習 報告書６
都市における日常の小さなサードプレイス（岩舘プロジェクト）

プロジェクト演習 報告書７
ねこっちさんビデオ通信～文京 Deep な人（岩﨑プロジェクト）

プロジェクト演習
報告書
1
まちラボ本郷

芸術のマーケティング

■演習担当教員、学生　島田 昌和・小西 孝典、学生 12 名

■連携先　東京藝術大学後援アートマーケット　KOMOGOMO 展活動委員会

■プロジェクト概要

このプロジェクトは、東京芸術大学出身の作家が主催する KOMOGOMO 展とコラボをして実施した。継続３年目となった 2022 年度は、アートと遠い若者がどうやったら近づくことができ、さらにその魅力を人に伝えることができるかを目標課題とした。

前期中に KOMOGOMO 展のお二人にお話を伺って、彼らの活動を理解し、実際に自分で簡単な日本画を描くワークショップを体験した。さらにグループに分かれて、自分たちで画廊や個展を訪ねてアーティストにインタビューすることを体験した。恐る恐るの訪問と取材であったが、直接話すことで得られる楽しさを実感した。前期・後期とそれぞれに有志で上野公園の KOMOGOMO 展会場を訪れ、出展作家と会話し、雰囲気を味わうことで、距離を縮めていった。

後期からは、自分たちがさらに同じ世代の若者にアートの魅力を伝えるにはどうしたらいいかを考え始め、自分たちが体験したワークショップと、KOMOGOMO 展参加アーティストとのトークショーを企画した。企画立案、作家等との打ち合わせ、ポスター・ビラのデザイン、集客と申し込み、アンケートの用意、会場のレイアウトとその設営、必要な備品や材料の検討、司会進行の検討、会場提示資料の作成などをいくつかのチームに分かれて進めていった。まったくゼロからイベントを企画して集客し、参加者に満足してもらう事をめざすという、はじめての体験に大いに戸惑いながら、何とか形にすることが出来た。

実施概要としては、12 月 1 日 (木) の 18 時 10 分から 19 時 30 分に「アートって何？～意外と身近にあるアート」と題してワークショップとトークショーを開催した。講師には東京芸術大学絵画科・同大学院文化財保存学を修了した林宏樹氏にお願いした。20 名近くの参加者に来ていただくことができ、満足度の高いイベントとすることができた。準備段階ではまごつくことが多かったものの、イベント当日はそれぞれが自分の役割をきちんとこなした。事後には、反省としてコミュニケーションを取ることの大事さをそれぞれに口にしながらも、実際に自分たちの手でアートに関わるイベントを実施したからこその手応えと次に必要なステップを考えることができた。

ゲスト講師によるトークショーの様子

イベント参加者全員による集合写真

プロジェクト演習
報告書
2
まちラボ本郷

「スポーツ」があるまちづくり

■演習担当教員、学生

青木 通、学生 13 名

■連携先

あさひ菓子店、KAJITSU 本郷店、mammies an sourire 本店

■プロジェクト概要

核家族化が進み、独居する高齢者や両親の共働きにより放課後に帰宅しても大人がいない子どもたちが増えている。また、人と人とのつながりの希薄さから災害時における地域の防災機能、犯罪や事故に対する地域の防犯機能も低下しているといえる。このため、都市部においてはコミュニティの形成が重要であり、多世代の交流を深めていく地域活性化策が求められている。特に、スポーツを活用した取り組み事例は数多く報告されており、いずれも地域住民の健康づくりと世代間の交流が意図されていること、地域住民が主体的に運営参加できることが共通点としてあげられる。

本プロジェクトにおいては、どの世代においても実施率が高いウォーキング、ジョギングに着目し、「まちラボ」をスタート、ゴールとしたマップ作りに取り組んでいる。また、「まちラボ」を起点とすることによって、コミュニティ形成の観点から人が集まる拠点として機能することが期待される。

これまでの活動においては、「後楽園・小石川」「千石・白山」「本駒込・千駄木」「根津・湯島」の 4 エリアにそれぞれ一周約 5kmの周回コースを設定している。今年度は既存コースの集約化と新たに距離の短いコースの設定を行っており、コースの多様化を図っている。加えて、試験的な取り組みとして、学生向けのウォーキングイベントを企画・運営し、地域住民を対象としたイベントを実施する際の検証作業を行った。イベントの内容としては、⑴コースポイントをクイズにしたウォーキング（千石コース）、⑵コースエリア内の複数の店舗から協力を得て、スタンプラリー形式のウォーキング（後楽園コース）、⑶コースポイントににについて複数のヒント写真を提示し、速く、正確に巡ってきたかを競争するウォーキングを実施した。いずれも、ゲーム性のあるイベントのため若い世代を対象とした場合には反応がよく、ウォーキングという運動をすることによる快感情の認識が得られやすくなる効果が認められた。また、地域の文化的な施設に直接触れることができる機会であり、区の魅力を実感することができたという参加者の声を聞くこともできた。一方で、イベント周知の方法については多くの課題が残り、実質的には SNS 等を活用したプロモーションが必要である。加えて、商店街とタイアップし、ポスターを貼り付けるなどのアナログな手法も活用していく必要がある。

イベントでカメラ当選！

健康とまちづくりウォーキングイベント

プロジェクト演習
報告書
3
まちラボ本郷

文京まちあるきコースづくり

■演習担当教員、学生

貫井 万里、学生 13 名

■連携先

合同会社 Vanta、ZAKURO らんぷ家、用心棒 本号

■プロジェクト概要

【プロジェクトの紹介と今年度のトピックス】

文京まちあるきコースづくり「文京区の魅力の発信と発見」プロジェクトは、学生たちが文京学院大学本郷キャンパスが位置する、東京都文京区周辺の様々な魅力ある場所を発見し、自分たちで決めたテーマに沿って、見所スポットをまちあるきコースで紹介するプロジェクトである。2022 年度は、「リフレッシュコース」と「まんぷくコース」と「Café & Sweets コース」の 3 つのコースを作成した。

「リフレッシュコース」では、東京ドームシティやスパ ラクーア、ホテル椿山荘東京のアフタヌーンティー、小石川後楽園、下町の甘味処ちょんまげいもたまる、中東の文化を体験できる ZAKURO らんぷ家、老舗の銭湯ふくの湯、中華の玻璃家、アイリッシュパブ風のエールユシマなど、様々な観点から文京区内で別世界を味わってリフレッシュできそうな場所が紹介されている。

「まんぷくコース」は、おいしく量もたっぷりで元気が出そうな 5 店舗（洋食レストランのキッチン K、二郎系ラーメン屋の用心棒本号、こだわりの卵を使った下町たまご食堂 一卵亭、丼物のメニューが豊富な札幌軒、プロレスファン御用達のネオプロレス Bar たかところ）を厳選して掲載している。実はまんぷくコースの裏テーマはプロレスである。プロレスの聖地、後楽園の周りにはレスラーやプロレスファンの集うお店がたくさん存在する。そんなプロレスファンも納得のコースになっている。

「Café & Sweets コース」は日暮里駅をスタートし、谷根千を巡るお散歩道を歩いていて疲れたら素敵なカフェで休み、スイーツを食べてまたまち歩きを楽しめるコースになっている。日暮里駅を降りて assatte のジェラートに向かい、古民家の 2 階にある喫茶ニカイから谷中墓地を抜けると洋菓子店マルグリートがある。そこから根津駅に向かって言問通りを行くと煙突が見えてくる。築 70 年の銭湯を改装した CAFE & MORE MIYANOYU か 5 坪の小さな自家焙煎珈琲店の FIVE COFFEE STAND & ROASTERY でちょっと休憩した後、本郷方面に歩くと老舗の和菓子屋御菓子処扇屋とサステナブルな素材を使った Be green by KIELO COFFEE にたどり着くことができる。

連携先とのイベントとして、12 月 15 日に、ZAKURO らんぷ家でオーナーの吉野薫様のご協力を頂き、「手作りガラス細工クラフトワークショップ」を開催した。リフレッシュコースとカフェコースのメンバーに加え、招待客にもご参加頂き、吉野先生とリリー先生に教えて頂きながら 15 名がキャンドルホルダー作りに取り組んだ。まんぷくコースのメンバーはパンフレット掲載店舗のラーメン屋さん用心棒本号とスペシャルトッピングのアイディアについて話し合いを進めている。地図は、合同会社 Vanta の北爪秀紀講師によるご指導のもと、地図デザイン担当の学生が制作した。

「レストラン・ザクロ」でキャンドルホルダー作りに取り組んでいる様子

完成したキャンドルホルダー

プロジェクト演習
報告書
4
まちラボ本郷

「子どもの貧困」
―動坂テラスとの連携を通じて―

■演習担当教員、学生　古市 太郎、学生７名

■連携先　動坂町会、動坂テラス

■プロジェクト概要

【経緯】 演習目的は「子どもの貧困」である。このテーマにいたるまでのプロセスを説明していくと、まずSDGs17項目に基づいた、チームで共有される問題意識を探るところから始めた。その17項目から、学生たちはゴール１「貧困をなくそう」とゴール12「つくる責任、つかう責任」の２項目に焦点を当てた。そして、先行研究調査を重ねていくうち、近年、「子どもの貧困」が増えていることを知り、「7人に1人が相対的貧困」に陥っていることがわかった。そこで文京区地域福祉コーディネーター・中川さんをゲストスピーカーに招き、文京区の「子どもを取り巻く」現状を説明いただいた。そして、専門職が対応できる「子ども・貧困」問題と、学生が関われる「子ども・貧困」問題とがあることがわかった。中川さんから、文京区で「子どもを取り巻く課題」に対して活動している「動坂テラス」を紹介していただき、視察を行った。

ハロウィンウォークラリーの様子

【目的】 先行研究、ゲストスピーカー、そして視察から得たものを踏まえ、学生間で話し合いを重ねる内に、学生と年齢が近い「子ども」に着目し、さらに子どもにとって「居場所」とは何かを考え、居場所と「子ども」を接続する企画を練成していった。したがって、本活動の目標を、子どもたちとの交流と地域と子どもを結びつける「居場所づくり」とした。

【活動】 その目標達成のため、月に一度「動坂テラス」と打ち合わせをしながら、8月から翌年1月下旬まで、最低月に1度の頻度で学生主催のイベント企画を行った。その具体的な活動として、8月4日、30日に学生主催「どろだんごづくり」の開催、動坂テラス主催のイベントを手伝いながら、10月29日土曜日「ハロウィンイベント・ウォークラリー＆文字合わせゲーム」を実施した。内容については、子どもたちが仮装してお菓子をもらったり文字を拾ったりしながら、まちを練り歩く。約40分をかけて、「動坂テラス→澤田写真館→○○さんのおうち前→内藤歯科→動坂会館」というコースを歩いた。文字は２種類あり、１つはハロウィン参加カード用、もう１つはお菓子に書いてあり、最終地点の動坂会館では、このお菓子に書いてある文字を皆で組み合わせ、子どもたち同士で言葉を完成させてもらい、言葉が完成したら、特別な景品をプレゼントした。1月14日には、自主開催による「縁日イベント」も開催した。

このように、学生企画のイベントを通じて、居場所である「動坂テラス」の周知あるいは「子どもたちをつなげること」に一貢献できたのではないかと考える。

ハロウィンウォークラリー参加の子供たち

泥だんご作り

プロジェクト演習
報告書
5
まちラボ本郷

キャンパスエコロジープロジェクト
― ペットボトル削減化の推進 ―

■演習担当教員、学生　中山 智晴、学生９名

■連携先　ウォータースタンド株式会社、文京学院大学本郷キャンパス施設課、学生支援センター

■プロジェクト概要

地域の環境問題を改善する前に、先ずは大学の環境改善に取り掛かることが重要であるとの認識のもと、大学生と共にキャンパスエコロジープロジェクトを開始した。

プロジェクトテーマは、現在、世界的に大きな話題となっている廃棄プラスチックに着目することとした。世界中に氾濫するプラスチックは川や海を伝わり広がり続け、今では南極でも発見されている。廃棄プラスチックは生物濃縮の作用によりプランクトンから魚、ほ乳類、そして人間へとその体内に蓄積され続けている。世界経済フォーラムによれば、このままの状況が続くと、2050年には世界の海の魚すべてを合わせた重さよりプラスチックゴミの重さが上回ってしまうと警笛を鳴らしている。

このような状況の中、キャンパスからプラスチックごみを減らす取り組みが急務であると考えプロジェクトを始動した。プロジェクト目的は削減であるが、まずは学内の学生に現状を伝えること、皆で取り組む姿勢を作り出していくことが一番重要であると考えている。

本プロジェクトでは、学生が校内でも多用しているペットボトルに焦点を充て削減化を実施することとした。アンケート調査による学生の環境意識の把握、ポスターでの啓発、ウォーターサーバー導入によるペットボトル削減化の効果を把握しエコロジーキャンパス化を目指す。

本郷キャンパスでは、7月7日からウォーターサーバー３台を設置し、ペットボトル削減を目指すキャンパスエコロジーの社会実験を実施している。ここでは、以下２点についての12月末までの途中結果を報告する。

１．ウォーターサーバー設置による環境意識変化（学生147名へのアンケート結果）

設置後に環境問題への「意識が変わった」と回答した学生が49%、「少し変わった」を含めると85%の学生の意識が変化している。本取り組みでプラスチック利用・削減への「意識が変わると思う」と回答した学生も72%いることから、ウォーターサーバー導入によるペットボトル削減化の効果はあると考えている。

校内に導入したウォーターサーバー

２．削減効果

ウォーターサーバー使用水量を継続測定することにより、新規ペットボトル購入本数の削減化をおおよそ推定･算出できる。7月7日から10月13日の3ヶ月6日間で削減されたペットボトル最大本数は約2970本分（500mlペットボトル）に相当、またCO_2換算で344kgの削減化に成功する結果となった。

今後は、学生がデザインしたマイボトルを制作、校内で販売するが、マイボトルのOQコードを活用して本活動の意義や学生の活動内容等を学内外に発信し、地域での環境改善行動につなげていきたい。

プロジェクト演習
報告書
6
まちラボ本郷

都市における日常の小さなサードプレイス

■演習担当教員、学生　岩舘 豊、学生 11 名

■連携先　Rural Coffee、VaLerio Luana

■プロジェクト概要

サードプレイスとは、都市社会学者オルデンバーグが提唱した概念で、匿名性が高く、弱いつながりを生み出す場所性をさす。本プロジェクトでは、サードプレイスをキーコンセプトとして、文京区向丘にある Rural Coffee と連携し、おもに２つの活動を行なった。第一に、Rural Coffee が主催する子どもまつりといったイベントの企画・運営協力である。第二に、Rural Coffee や VaLerio Luana といった地域のカフェ空間を拠点とした日常的かつ小さな場づくりである。

まず前期において、8 月 6 日に開催された「向丘・白山子どもまつり」の企画・運営に参加した。具体的には、ポスターやマップ制作、ブースの補助、受付、そしてまちラボでの水鉄砲射的などを行なった。コロナ禍において、多くの方のお力添えをいただき、まちラボを会場として地域イベントに参加できたのは、大きな成果であった。

後期からは、２つのチームに分かれて活動した。Rural Coffee と連携したチームは、10 月から 12 月にかけて月 1 回のコラボカフェを開催した。独自メニューやイベント企画を考案し、毎回夜遅くまで居残って、熱心に準備にあたった。そして、何よりも、「続ける」ことによって、地域にも少しずつ浸透し、小さいけれども確かな「サードプレイスなるもの」を生み出すことができていた。一方、VaLerio Luana と連携したチームは、「防災カフェ」を企画し、乾パンといった非常食をアレンジしたメニューを考案・紹介した。この企画は、Yahoo のローカルニュースで記事として紹介されるなど、その向かう先に肥沃なものが宿っていることを予感させた。

コロナ禍３年目、地域のなかで学生たちが毎週のように継続して活動できたこと、そうした状況を有難く感じる。コロナ禍以降の都市社会における「日常の小さなサードプレイス」をさらに探究していきたい。

向丘・白山子どもまつりまちラボ会場

Rural Coffeeとのコラボカフェ(インスタグラム投稿)

防災カフェのポスター

プロジェクト演習
報告書
7
まちラボ本郷

ねこっちさんビデオ通信～文京 Deep な人

■演習担当教員、学生　岩﨑 正昭、学生 9 名

■連携先　地域連携ステーション「フミコム」(取材対象紹介)、文京メディア・ブリッジ合同会社（取材対象紹介)、株式会社ファーストショット（映像技術会社)、激弾 BKYU 制作部（編集指導）

■プロジェクト概要

本プロジェクトは根津、向丘、千駄木、白山『ねこっちさん』（＋本郷、弥生、西片など学校周辺も含む）と名付け、地域の人々とかかわり、人々の営みを知り、そして未来に向けた活動状況などを取材し映像に記録するプロジェクトである。

地域の課題や問題に向き合い、学生全員で問題解決に向けた糸口を探りだし、アーカイブ的な作品作りを目指している。

授業の流れとしては学生たちで地域のことを調べ、討議してゲストを選定し、台本を作成、撮影プランを立て、そして撮影に挑み、20 分程度の作品に仕上げる。

撮影はプロデューサー、ディレクター、カメラマン、リポーターなどの役割を決めてチームで行われ、編集もチームで議論しながら進めて作品を作り上げていく。

作品作りのノウハウはプロの映像制作者に指導を得て、基本的な撮影システムや編集技術を身につけ、20 分ほどの作品に仕上げていき、文京映画祭へ出品する。

2022 年度は、以下の 3 作品を制作した。

１．西片にある『La Cantine Ran（ラ・カンティーヌ・ラン＝学生食堂というフランス語の意)』のオーナーで、アフリカへ修行に行ったという不思議な経緯を持っている山本義廣さんを取材した。古くから地域の人々や学生たちから愛された喫茶店（カフェではなく)。この街の風景を見つめてきたオーナーの優しいまなざしに心が癒される作品になっている。

２．「ワクワクする生き方を作る場所」というコンセプトを掲げる我楽田工房にスポットライトを当てた。地方と都市との交流、地域ビジネス創造支援サービス、子育て支援などを手掛け、地域共生を追求している集団である。ここのレンタルキッチンから生まれたグラノーラは、子育てママ×農家×専門家が連携して開発した。その代表の横山貴敏さんの活動を取材した。

３．若者二人が自分たちと仲間で立ち上げた『ねづくりや』。古い民家をリニューアルして地域の人々と触れ合う、地域に根差したお店を取材した。飲食・物販・イベントで、メニュー作りからオリジナル商品開発まで人と街とのつながりを大切にしながら挑戦し続ける、鶴元怜一郎さんと金光良太さんにインタビューをした。その中で私たちは地域との交流・関わりを学んだ。

10 月20 日La Cantine Ran でのインタビュー撮影風景

10 月27 日ねづくりやで集合写真

11 月17 日まちラボで我楽田工房の撮影

まちラボプロジェクト実習Ⅰ・Ⅱ
（通年）

人間学部コミュニケーション社会学科４年生の選択授業。
社会問題の改善のために学生自身が問題を提起し、
その改善に向けて立案し、組織体制を構築しながらプロジェクトを進めていく実践的講義。
本授業は「まちラボプロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ」で学習した内容を踏まえたもので、
プロジェクト成果を社会へ還元することを最終目的としている。

プロジェクト実習 報告書１

大学生の意識向上のための環境教育の推進を目指して
―ビーチクリーン活動を通した海洋プラスチックごみの削減化を例に―
（中山プロジェクト）

プロジェクト演習 報告書２

地域の居場所「こまじいのうち」は地域社会でどのような機能を果たしているか
（古市プロジェクト）

プロジェクト演習 報告書３

赤羽中央街商店街魅力探究プロジェクト―ビジュアルブック作成を通じて―
（岩舘プロジェクト）

プロジェクト実習
報告書
1
まちラボ本郷

大学生の意識向上のための環境教育の推進を目指して
―ビーチクリーン活動を通した海洋プラスチックごみの削減化を例に―

■実習担当教員、学生　中山 智晴、学生 12 名

■連携先　公益財団法人かながわ海岸美化財団、NPO 法人 海さくら

■プロジェクト概要

海洋への投棄によるプラスチック海洋汚染は深刻であり、すでに世界中で被害報告が提出されている。たとえば、海洋生物の誤飲による影響がある。投棄プラスチックは海洋を漂う中で、雨・風や紫外線などの影響を受け細かく粉砕されていくが、その中でも５ミリ以下になった「マイクロプラスチック」の影響は深刻である。エサと間違え小魚やカメなどが大量に誤飲する結果、プラスチックに汚染された小魚を中型魚、そして大型魚が食べていく食物連鎖の中で、生態系の上位に行くほど体内にプラスチック成分が接収されている現状が報告されている。この生物濃縮は人類に大きな影響を与える。すなわち、生態系の上位に位置する人間の体内には、生物濃縮により直接はプラスチックを接収していなくても、日々の食を通して体内に間接的に溜まっていく仕組みなのである。

研究テーマを「大学生の意識向上のための環境教育の推進を目指してービーチクリーン活動を通した海洋プラスチックごみの削減化を例にー」とした。本研究の目的は「環境教育と環境啓発の在り方を考える」ことで、環境に意識を向ける人を増やし削減化を進めていく効果的な方法を考察する。

研究の進め方であるが、

（１）海洋汚染の現状調査（文献調査）
（２）大学生の環境意識調査（環境意識、取り組み状況、ビーチクリーン認知度など）
（３）ビーチクリーン活動の課題と普及（現地調査）
（４）楽しく参加できる環境教育活動の立案（魅力的なビーチクリーンの検討）
（５）環境啓蒙活動（海と生活を共にする方々へのインタビュー動画作成・配信）
（６）効果的な活動内容と不法投棄削減効果の検証・考察

とする。また、本プロジェクトは神奈川県江の島周辺の海岸をフィールドとする。

本プロジェクトの成果は 2022 年 11 月 23 日に開催される「文京区エコ・リサイクルフェア」で出展するとともに、12 月には５歳児十数名に対し、こども環境教室開催の依頼に応える形で「プラスチックごみが海で暮らす動物に与える影響」についての講座を実施する。

海ごみアクセサリー制作

江ノ島でのビーチクリーン

自作の環境カルタ

プロジェクト実習
報告書
2
まちラボ本郷

地域の居場所「こまじいのうち」は地域社会でどのような機能を果たしているか

■実習担当教員、学生

古市 太郎、学生 7 名

■連携先

こまじいのうち、神明上町会、神明西部町会、動坂町会、動坂テラス

■プロジェクト概要

本プロジェクトの目的は「地域社会で『こまじいのうち』はどのような機能を果たしているか」であり、アンケート調査を通じてその目的を明らかにすることである。

先行研究としては、1 章で「少子高齢化」、フィールド先である東京都文京区の高齢化事情やその取り組みについて検討した。2 章で、「限界集落と都市部の問題」について、とくに「都市が抱える問題」について検討した。3 章では、都市部の問題の検討を深め、孤立・孤独、無縁社会について、最後にはソーシャルキャピタルの必要性について確認し、1 人暮らしの世帯などでは近隣とのコミュニケーションの場が必要であり、居場所の重要性につながるという認識に至った。4 章で、これらの諸問題の一解決策として有効であると考えられる「居場所」あるいは「サードプレイス」について考察した。

このように、「こまじいのうち」を拠点とし、居場所活動を行う意義とは、住民同士誰がどこに住んでいるかもわからない、そんな社会になってしまっている現状があるため、私たちはこの「こまじいのうち」を人とのつながりを育む場所として位置づけ、考察及び実践活動を行った。

こまじい食堂にて

先行研究を踏まえたテーマを明らかにするべく、アンケート調査を行った。テーマである「地域社会で『こまじいのうち』はどのような機能を果たしているか」をもとに、文京区での子育て世代を対象に大きく 3 つのキーワードに分けて、「子育て」、「居場所」、「地域との関わり」についてのアンケート調査を、12 月 18 日に開催された「サンタとパズルウォーク」で実施し、分析および考察をした。

そのイベント内容は、「こまじいのうち」を出発点とし、天祖神社と動坂テラスを周って、「こまじいのうち」に帰ってくるという「ウォークラリー」をベースとしたものであり、それらの拠点を周る際に、応募対象者ごと（幼年者、小学生低学年・高学年など）にカードが配られ、そのカードを集めて、そのクイズに答え、景品をもらうというものである。

このイベントは 4 年生が主催で 3 年生が手伝うという形で実施された。実習初のコラボである。参加者は保護者含め 27 名。まだまだ学生のブランド力の無さを感じたりもしたが、周知に関しては、駒込地域活動センター所長および駒込地区連合町会長のご尽力があり、町会掲示板にチラシを貼らせていただけることで、参加者を何とか集めることができた。学生だけの周知では、この人数を集めることは難しかったであろう。先輩たちが積み上げた地域への信頼を、後輩へしっかり手渡していきたい。今年のプロジェクトは困難を極めたが、「小さくもあるが大きな」礎を築けたのではないだろうか。

「こまじいのうち」にての活動

プロジェクト実習
報告書
3
まちラボ本郷

赤羽中央街商店街魅力探究プロジェクト
―ビジュアルブック作成を通じて―

■実習担当教員、学生

岩舘 豊、学生 10 名

■連携先

赤羽中央街商店街振興組合、北区産業振興課商工係

■プロジェクト概要

ビジュアルブックの表紙

本プロジェクトでは、東京都北区赤羽にある中央街商店街と連携し、地域社会における商店街空間の潜在的価値や機能を分析・発信する企画を立案・実行した。具体的には、春から夏にかけて、商店街でのインタビューによる調査を重ね、信頼関係を構築していき、魅力を発信するビジュアルブックの制作に取り組んだ。また、ビジュアルブックを活用しながら商店街の魅力を発信するための企画として、10 月 29 日には商店街がもともと開催していた「味覚セール」に連動したハロウィンイベントを実施した。

イベント当日は、赤羽小学校の協力もあり、予想を超える来場者があり盛況なものとなった。イベントそのものは、広報や運営に至る様々な改善すべき点も多かった。しかし、当日の様子を見ていると、この企画は、新住民の流入や再開発などの変化に直面している、赤羽の地域社会に潜在している「ニーズ」の核心にあるものに届こうとしてように感じられる。その「ニーズ」をさらに言語化していく作業が求められている。

本プロジェクトに対しては、北区商店街連合会および赤羽中央街商店街振興組合より「感謝状」が贈呈された。有難いことである。しかし、こちらの方こそ、学生を温かく迎え入れ、インタビューや打ち合わせにお付き合いいただいた、尾花秀雄さんはじめ中央街商店街関係者の皆様に対し、心から感謝したい。

ハロウィンイベントの様子

感謝状を受け取る様子

まちラボ研究活動・地域活動

まちづくり研究センターにおける自主的な研究・地域活動。
教職員が企画者となり、大学や地域の中で展開する活動。
コロナが落ち着いてきたため、学生が地域に出ていく機会が増えてきた。

活動報告書 1
文京区学生支援担当者連絡会議（通称：地域ニーズの会）（古市・森下・滝川プロジェクト）

活動報告書 2
地域と繋がる掲示板（森下プロジェクト）

活動報告書 3
Sorting Art（分別アート）プロジェクト（森下プロジェクト）

活動報告書 4
コスメバンクプロジェクト in 文京学院大学（森下・滝川プロジェクト）

活動報告書 5
ぶんぶん新聞（栗原・岩舘プロジェクト）

活動報告書 6
移動式屋台を活用した日常の小さなサードプレイスプロジェクト（栗原・岩舘プロジェクト）

活動報告書 7
地域の障害者就労支援施設でのインターンシップ・プログラム開発（田嶋・武田プロジェクト）

活動報告書 8
ふじみ野昭和アルバム（「都市化と地域社会」研究会）（岩舘プロジェクト）

活動報告書 9
ふじみ野学生ミーティング報告（栗原プロジェクト）

活動報告書 1
まちラボ本郷

文京区学生支援担当者連絡会議（通称：地域ニーズの会）

■担当：古市 太郎、森下 英美子、滝川 多美
■連携大学・機関：跡見学園女子大学、拓殖大学、中央大学、東洋大学、日本女子大学、文京学院大学、地域連携ステーション（フミコム）

コロナ禍で学生と地域との連携における形も変わる中、区内の大学の学生支援の取り組み内容と実施体制を伺う機会として「学生支援担当者連絡会議」（通称 地域ニーズの会）を、2021 年 4 月から毎月行っている。これまでに、連携大学の取り組みを伺いながら、お互いの情報交換を行ってきた。

2021 年度には跡見学園女子大学にて学生による報告会が開催され、2022 年度は文京学院大学にて「学生ボランティア活動と地域が求めるもの」をテーマとした報告会・交流会を開催する。

開催趣旨は以下の通りである。学生ボランティア活動の多くは、環境保全、海洋プラスチックゴミ、居場所づくりなど、何かしらのテーマに基づいている。そして、それぞれのテーマによる活動を推し進めていくうちに、そのテーマとは別の、その地域が持つ課題にふれることがある。地域活性化が目的の「子ども○○イベント」を開催していくうちに、遊び場所の少なさ、居場所の重要性に気づくことなどがその例であり、それは、その活動をしたからこそ発見できた新たな地域課題となる。

「ふれた」新しい地域課題を「つかまえた」なら、それが新しいボランティア活動につながっていくだろう。各大学の報告を受けて、共通の関心を持つ学生による大学間交流を行い、大学生が地域貢献活動あるいはフィールド学習を通じて、コロナ禍だからこそ「地域」に関わることの意味及び重要性を見いだせるのではないだろうか。

文京区内の大学教職員による地域活動報告会打合せ

活動報告書
2
まちラボ本郷

地域と繋がる掲示板

■担当：森下 英美子

まちラボ本郷の白いフェンスの向こう側には、歩道を通る人たちやバスを待つ人たちが目にすることができるまちラボの掲示板があり、イベントのポスターや「自然だより」など、毎月のまちラボ案内を掲示している。

この掲示板ができた当初は、掲示板の効果がどのくらいあるものなのか心配していたが、イベントのアンケートの回答では、掲示板を見て申し込んだという方も何人かいらっしゃるので、まったく見られていないということではないようである。

今年度は、夏祭りや、地域の方々に参加を呼び掛けるまちラボ主催のイベントの掲示が増え、地域に開かれたまちラボが復活し始めた。また、人間学部にとどまらず、他学部の先生が開催するイベントのポスターを貼るなど、新しい試みも始まった。

毎月の「自然だより」では、花や虫、鳥などのキャンパス内の自然を紹介している。新型コロナなどの社会情勢とは関係なく定期的に掲示できるものはないかと考えて生まれた掲示である。自然が好きな職員が、キャンパス内の自然について写真と短い解説でつづり、月１回以上、不定期に掲示している。今年度は、キャンパス内で目に止まる植物やそれに集まる生き物だけでなく、地域の方にいただいた季節の花の様子なども紹介することができた。目を向ける範囲が、キャンパスだけでなく地域へと、少しだけ広がったように感じられる。

緑の中の掲示板

動きが速くて、何度追いかけても撮影できなかった昆虫もいた。「自然だより」には書くことができなかったが、青く光るハバチ、ピンクのガなど、美しい色彩の昆虫たちが、学内に植えられた植物の害虫だったり、外来種だったりしたこともあった。

発見した昆虫の食草となる植物が少し離れたところに見つかることもあり、都会の中にも小さな生態系があることを実感できた。

担当者も、都市自然環境を感じることができる掲示を通じて、自然に対する見方が少しずつ変化してきている。本郷キャンパスの前を通ることのある方は、少し足を止めて、掲示板に目を向けていただけるとうれしい。

活動報告書
3
まちラボ本郷

Sorting Art（分別アート）プロジェクト

■担当：森下 英美子、菖蒲澤 侑

このプロジェクトは、アートの専門家である児童発達の菖蒲澤（2022 年度育休中）と環境の専門家であるまちラボの森下のコラボで誕生したプロジェクトである。 子どもたちのアート作品制作では、リサイクルできる素材を使うことがあるが、複数の素材を混ぜて使うため、展示後の分別が大変だった。そこで、捨てる前にリサイクルするものを分けるのではなく、材料として同じ材質のものだけを集めて制作すれば、展示期間が終わった後、作品がそのままリサイクル素材や資源となる。それが Sorting Art（分別アート）である。

２年目を迎えた今年度は、昨年に引き続きプラスチックを使った季節行事展示と夏休みの子どもの工作活動を行った。森下の授業、自然環境保護論で七夕飾りを、環境教育論ではクリスマス飾りを制作、それぞれまちラボに展示した。そして、夏休み期間には、「ふじみ野市環境学習館えこらぼ」にて、親子を対象とした環境学習講座を実施した。

昨年度の課題であったハンディシーラーで接着を行うむずかしさについては、プラスチック素材の養生テープやビニールテープ、プラスチック用接着剤を使うことで改善を行った。接着剤を使うことで、「お菓子の袋に描かれている絵を切り取って貼り付けることができた」、「テープを使うことで簡単に制作できた」、「効率が上がった」などの意見が上がると同時に、「ハンディシーラーで十分制作できたのでわからない」という意見も多かった。環境面では、新たなプラスチックを追加しないという意味でハンディシーラーが一番よいのだが、選択肢を広げることで作品の幅も広がったと考えられる。感想の中に「みんなでわいわいできることがよかった」という言葉があり、コロナ入学と呼ばれる世代の、たったひとりでオンライン授業を受け続けた寂しさを垣間見たように思う。

また、指導側では袋にこだわっていたが、プラスチック容器の組み合わせでワニを作った小学生がいたことにより、自由に作ることの可能性が感じられた。

小学生の作品「ワニ」

七夕飾り

クリスマス飾り

活動報告書
4
まちラボ本郷

コスメバンクプロジェクト in 文京学院大学

■担当：森下 英美子、滝川 多美

この活動は、地域ニーズの会で５月に東洋大学で行われたコスメ配布プロジェクトの紹介を受け、本学でも 11 月～１月の期間に展開することとなったものである。

企業が寄付または商品には問題がないにもかかわらず販売できないコスメを提供し、大学がコロナ禍で収入が減っている学生、就職活動などで化粧品が必要な学生などコスメで困っている学生にマッチングする。そして、企業と大学を取り持つ団体名が「コスメバンクプロジェクト」である。

まずは、学生と対面する機会の多い職員の方々や、まちラボとゆかりのある教員の方々に呼びかけ、困っている学生にできるだけ情報が届くように案内をお願いした。

「コスメバンクプロジェクト」から提供された 40 セットに対して 50 人以上の応募があり、当選者には、まちラボまで取りに来てもらうという形を取った。全学部から応募があり、初めてまちラボに足を踏み入れたという学生も少なくなかった。期限内に受け取りに来なかったコスメは再抽選を行い、最後のひとりまで受け取りに来てくれた。

このプロジェクトを展開していく中で浮かび上がったのが、貧困だけでなく、ジェンダー、SDGs にもつながるということだった。経済的に苦しいと思われる学生は、申し込みに躊躇する様子が感じられた。男子は、想定したよりおおらかに、当たり前のように申し込んでくれた。渡すときに「全部使うことが SDGs だからね」と伝えると、どの学生もにっこり笑って受け取ってくれた。そして、「え？こんなにたくさんあるの？」という第一声に続いて、使ったことのないブランド品が含まれていることに驚いていた。

申込者アンケートでは、コロナの影響や国家試験の勉強のために「バイトが減って化粧品を買えなくなった」という声が多く、「何を揃えたらよいかわからない」「色々なものを試したい」「廃棄を増やすのではなく使えるものはきちんと使ってあげたい」などの声もあった。また、生理用品で困ったことのある学生が非常に多いということも明らかとなった。

これらの現状をふまえて、このプロジェクトを次のステップへと進めていきたい。

配布されたコスメを開けてびっくり

各自、お礼のメッセージを書いて貼りました。

お礼のメッセージ

活動報告書
5
まちラボふじみ野

ぶんぶん新聞

■担当：栗原 真史、岩舘 豊、文野 洋、菖蒲澤 侑

マスメディアやインターネット上に情報の溢れる時代にあって、「地域新聞」は、地域にとって関心のある事柄を取り上げ、小さな範囲での情報交換・交流を作り出す、ローカル・メディアとしての役割をもつ。2020 年度より、コロナ禍で対面活動が困難となるなかで、まちラボふじみ野では、大学と地域をつなげるための地域新聞づくり活動を始めた。

2021 年度第１号では、「住」をテーマに、ふじみ野の企業や団体にリモートで取材をお願いし、地域の暮らしを支える畳店や伝統産業の情報を学内外に発信してきた。

2022 年度は、前年度から継続して、第２号の発行を目標に、学生が中心になって新聞づくりを進めてきた。企画・編集の学びをイチから進めるなか、第２号では「まちラボの活動紹介」をテーマに、学内の情報や自分たちの活動のことを地域の方々向けに紹介・発信することを目標とした。まちラボふじみ野の活動は、前年度に比べて、新しい取り組みやイベントへの参加、メンバーが増え、ますます活発になってきているものの、感染が収まらないなかで、地域の方々からは、そのような動きが直接的には見えづらい状況が続いている。より活発となり、再び大学の外に繰り出し始めたまちラボふじみ野の姿を、どのようにアピールし、地域の方々とのつながりを生み出すのか。こうした課題を念頭に、企画から編集まで学生自身が行い、自分たちなりに工夫しながら、記事やコラムを作成した。地域の方々に「伝わる」ための新聞づくりは、この一年間の自分たちの活動を見つめ直す貴重な機会にもなっている。

今後について、まずは年度内に第２号をふじみ野市内で配布することを予定している。他方、作業を進めてきたなかで、地元の高校生との共同執筆、ブログや SNS などのウェブメディアとの連携など、実現したいアイデアがいくつも生まれつつある。来年度以降にはこれらの発想を盛り込み、ふじみ野地域により一層親しまれる新聞づくりへのチャレンジを続けていきたい。

完成したぶんぶん新聞(記事の一部紹介)

活動報告書
6
まちラボふじみ野

移動式屋台を活用した日常の小さなサードプレイスプロジェクト

■担当:岩舘 豊、栗原 真史　■連携先:大井ショッピング商店会、おはなしケムケム（読み聞かせサークル）

移動式屋台を活用して、常設の構造物や店舗でもなく、一回限りのイベントでもない、一時的・仮設的なゆるやかに持続・変化する場づくりを通して、これからの地域社会形成のヒントを探る実践を行うことが本プロジェクトの目的である。

前期にはキャンパス内において、古着リメイクのワークショップと古着回収を行なった。まちラボ本郷でプロジェクトを経験した学生が中心となり、古着というモノを媒介とした、一時的な場づくりを毎週重ねていった。この活動をベースに、卒業生の支援を受けながら、6 月 25 日にはふじみ野市内で開催されたエコラボフェスタに出展した。

後期には、10 月から 12 月にかけて毎月、学内や地域イベントに参加した。10 月には、あやめ祭でのおでん・コロッケ屋台を出店し、学内に向けて大井ショッピング商店会を紹介した。11 月には、ふじみ野市の産業まつりに出展し、古着回収やまちラボの活動を紹介した。12 月には、ふじみ野市のアートフェスタに企画参加し、読み聞かせ屋台や古着を使ったリース制作ワークショップを行なった。学生の読み聞かせ指導にあたってくれた、おはなしケムケム（読み聞かせサークル）の皆さんには厚く感謝したい。

今年度は、少しずつ対面での活動を再開し、１年間、１年生から卒業生まで、学科を超えたメンバーでのプロジェクトとなり、屋台をあちこちに、にぎやかに出没させることができた。そのこと自体が心から喜ばしいと感じる。他方で、まだ「屋台」のポテンシャルを活かしきれているとは言えない。プロジェクトは始まったばかりとも思う。

ふじみ野エコラボフェスタの様子

ふじみ野アートフェスタの様子

あやめ祭でのおでん・コロッケ屋台

活動報告書
7
まちラボふじみ野

地域の障害者就労支援施設でのインターンシップ・プログラム開発

■担当：田嶋 英行、武田 和久

このプロジェクトでは、埼玉県富士見市にある障害者就労支援施設むさしの作業所（社会福祉法人 入間東部福祉会）にて、施設職員（本学卒業生）とともにインターンシップを受け入れる際のプログラム開発を行った。

２か月に１回、本学の担当教員が施設を訪問し、インターンシップ活動を通して、どのようにすれば施設の仕事を学生に理解してもらえるか検討した。今年度はコロナ明けで対面でのインターンシップが可能になったこともあり、年度の前半でプログラム開発を行い、夏休みの期間に、施設で実際にインターン学生を受け入れてもらい、本プロジェクトで開発したプログラムを実施した。事前のプログラム検討の場では、施設自体の概要を理解してもらうためにどのようなレクチャーをすれば良いか、施設職員と共同で検討した。

また、同施設ではこれまでもソーシャルワークコースの社会福祉士養成課程の学生を、実習生として頻繁に受け入れてもらっており、その実習内容と「差別化」する必要があることが共有化された。結果として、次に述べるプログラムの内容ができあがっていった。

今回のプログラムはこれまでの実習内容とは差別化し、「法人における課題解決」を目的とした内容で進められた。理由として、文部科学省における 2017 年度の「人材育成推進会議」の中の「社会環境の変化と求められる人材像」では、産学官で求めるスキルとして「課題解決力」が課題とされていることが挙げられる。そこでインターン学生には、課題解決プログラムを体系化した内容で、４つのステップを追って施設の課題解決を進めてもらった。プログラムの終了時には、インターン学生が施設職員への最終成果報告のプレゼンテーションを行い、学生視点での斬新なアイデアには施設の職員からも非常に高い評価を得ることができた。一方でプログラムには改善点も見受けられた。今回のプログラムにおいて特に重要な部分は、論理的思考を用いて課題の特定と原因の追究を行う箇所である。終了時のインターン学生の振り返りでも、限られた時間内で論理的思考を用いて体系的にその部分を進めるのが難しかったという意見が見られた。

来年度は、論理的思考を容易に進められるツールなどを融合させることも検討し、より良いプログラムを開発していきたい。

インターンを受け入れていただいている本学卒業生

むさしの作業所ですすめている様々な花の生産・販売

活動報告書
8
まちラボふじみ野

ふじみ野昭和アルバム（「都市化と地域社会」研究会）

■担当：岩舘 豊、栗原 真史

ふじみ野市（合併する以前の旧大井町や旧上福岡市）は、戦後高度成長期に農村から都市へと大きく変貌した地域である。1960年代以降、工場・企業誘致や住宅地開発が相次ぎ、都内からたくさんの人々が移り住み、新旧住民が入り混じりながら、それぞれの生活を築き上げてきた。1985年から1989年にかけて発行された『大井町史』は、こうした当時の変貌の雰囲気を色濃く伝えている。『大井町史』発行から30年以上を経て、日本社会全体の人口減少、東日本大震災、そして新型コロナウィルス感染症といった世界史災厄を経るなかで、首都圏郊外に位置するふじみ野もまた、新たな都市化の位相やまちづくりの課題に直面しつつある。

そこで、『大井町史』の現代史部分の調査や執筆に携わった当時の研究者である吉原直樹氏（東北大学名誉教授）と橋本和孝氏（関東学院大学名誉教授）を招聘し、当時の時代背景や地域の様子に即しながら振り返る研究会を開催した。そして、研究者・自治体・住民が連携して地域史を編んだ経験から、ふじみ野地域史研究の可能性と課題、そして、これからのまちづくりのためのヒントを探ることとした。

当日は、上記の研究者のほか、旧・大井町の戦後史を研究する歴史学者や、ふじみ野市の社会教育・郷土史関係の方々にもご参加いただき、ふじみ野の都市化やそのとらえ方、史資料の残し方や活用の仕方をめぐって議論が交わされ、時間が足りないほどであった。研究会の詳細は、別途作成中の報告書を参照されたい。

今回の研究会は、「まちづくりとしての地域史研究」の第１回として位置づけられ、今後の研究課題を明確にすることが目的であり、その目的は十分に達成できたように思う。それを基礎としながら、郊外・ふじみ野の地域史研究を引き続き進めていきたい。

月刊 こんにちは！わがまち

大井町・文化的町づくり急潮

『大井町史　資料編Ⅲ-2現代』636頁

研究会の様子

活動報告書
9
まちラボふじみ野

ふじみ野学生ミーティング報告

■担当：栗原 真史

制作／人間学部 心理学科　河田 栞奈（２年）・三野輪 桜楽（２年）

まちラボカレンダー（2022 年度　まちラボ本郷の活用状況）

授業 ／ 高校見学・説明会 ／ 地域ニーズの会 ／ 地域活動 ／ その他 ／ 休館日

4月

1 金	
2 土	
3 日	
4 月	
5 火	
6 水	
7 木	
8 金	
9 土	
10 日	
11 月	
12 火	
13 水	
14 木	岩舘ゼミ
15 金	
16 土	
17 日	
18 月	地域ニーズの会
19 火	
20 水	
21 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
22 金	
23 土	
24 日	
25 月	
26 火	
27 水	
28 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
29 金	
30 土	

5月

1 日	
2 月	東洋大学スタディツアー 新田ゼミ
3 火	
4 水	
5 木	
6 金	甲斐田ゼミ 登丸ゼミ
7 土	
8 日	
9 月	新田ゼミ
10 火	
11 水	
12 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
13 金	甲斐田ゼミ 登丸ゼミ
14 土	オープン キャンパス
15 日	
16 月	新田ゼミ
17 火	
18 水	
19 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
20 金	甲斐田ゼミ 登丸ゼミ
21 土	東洋大学スタディ ツアー（大雨延期）
22 日	
23 月	新田ゼミ 地域ニーズの会
24 火	
25 水	石村／情報処理
26 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
27 金	甲斐田ゼミ 登丸ゼミ
28 土	
29 日	
30 月	新田ゼミ
31 火	岩舘/ 地域の方と打合せ

6月

1 水	
2 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
3 金	甲斐田ゼミ 登丸ゼミ
4 土	富士見・浦和実業 高校見学会
5 日	
6 月	新田ゼミ
7 火	松戸高校見学
8 水	石村／情報処理
9 木	岩舘ゼミ まちラボP演習 東京電機大学ミニツアー
10 金	甲斐田ゼミ 登丸ゼミ
11 土	オープン キャンパス
12 日	
13 月	新田ゼミ
14 火	中央学院高校見学
15 水	
16 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
17 金	甲斐田ゼミ・登丸ゼミ 高校教員対象説明会
18 土	
19 日	
20 月	新田ゼミ
21 火	
22 水	石村／情報処理
23 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
24 金	甲斐田ゼミ 登丸ゼミ
25 土	
26 日	
27 月	新田ゼミ 地域ニーズの会
28 火	
29 水	
30 木	岩舘ゼミ まちラボP演習

7月

1 金	甲斐田ゼミ 登丸ゼミ
2 土	
3 日	
4 月	新田ゼミ
5 火	
6 水	
7 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
8 金	甲斐田ゼミ・登丸ゼミ 石村/情報処理
9 土	
10 日	
11 月	新田ゼミ
12 火	
13 水	石村／情報処理
14 木	岩舘ゼミ・まちラボP演習 八潮高校見学
15 金	甲斐田ゼミ・登丸ゼミ 石村/情報処理
16 土	オープン キャンパス
17 日	
18 月	
19 火	橘学苑高校見学 自然保護論補講
20 水	
21 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
22 金	甲斐田ゼミ 登丸ゼミ
23 土	
24 日	
25 月	
26 火	新スタッフ面接
27 水	石村／情報処理
28 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
29 金	
30 土	
31 日	

8月

1 月	
2 火	
3 水	
4 木	
5 金	
6 土	オープン キャンパス
7 日	こどもまつり
8 月	こどもまつり 後片付け
9 火	
10 水	
11 木	
12 金	
13 土	
14 日	
15 月	
16 火	
17 水	
18 木	
19 金	
20 土	オープン キャンパス
21 日	オープン キャンパス
22 月	
23 火	
24 水	
25 木	
26 金	
27 土	
28 日	
29 月	
30 火	岩舘ゼミ学生 自主研究
31 水	岩舘ゼミ学生 自主研究

9月

1 木	
2 金	
3 土	
4 日	
5 月	登丸ゼミ
6 火	
7 水	
8 木	
9 金	
10 土	
11 日	個別入試相談会
12 月	
13 火	
14 水	
15 木	
16 金	
17 土	
18 日	
19 月	
20 火	
21 水	
22 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
23 金	登丸ゼミ
24 土	オープン キャンパス
25 日	
26 月	
27 火	
28 水	
29 木	地域の方と打合せ 岩舘ゼミ・まちラボP演習
30 金	甲斐田ゼミ 登丸ゼミ

10月

1 土	
2 日	
3 月	
4 火	文京区役所より 見学
5 水	
6 木	高校教員見学 岩舘ゼミ・まちラボP演習
7 金	
8 土	
9 日	
10 月	
11 火	外国語学部教員 まちラボ利用相談
12 水	
13 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
14 金	甲斐田ゼミ 登丸ゼミ
15 土	
16 日	
17 月	
18 火	
19 水	Dラボ打合せ
20 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
21 金	甲斐田ゼミ 登丸ゼミ
22 土	併設校保護者 説明会
23 日	
24 月	
25 火	
26 水	
27 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
28 金	甲斐田ゼミ 登丸ゼミ
29 土	
30 日	
31 月	桜林高校見学

11月

1 火	
2 水	船橋敬明高校見学
3 木	
4 金	甲斐田ゼミ 登丸ゼミ
5 土	甲斐田ゼミ 登丸ゼミ
6 日	
7 月	
8 火	
9 水	松戸高校見学
10 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
11 金	甲斐田ゼミ 登丸ゼミ
12 土	併設校説明会
13 日	
14 月	アオバインターナショナル 教員見学・打合せ
15 火	
16 水	
17 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
18 金	甲斐田ゼミ 登丸ゼミ
19 土	
20 日	
21 月	地域ニーズの会
22 火	
23 水	
24 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
25 金	甲斐田ゼミ・登丸ゼミ・石村/統計学 施設担当者見学会
26 土	
27 日	
28 月	
29 火	
30 水	

コスメバンクプロジェクト

12月

1 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
2 金	甲斐田ゼミ・登丸ゼミ・公野ゼミ 鳩ケ谷高校見学
3 土	オープンキャンパス シャイン・オン！キッズ 子ども企画室
4 日	
5 月	古市ゼミ
6 火	
7 水	
8 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
9 金	甲斐田ゼミ 登丸ゼミ
10 土	
11 日	
12 月	古市ゼミ 新田ゼミ
13 火	
14 水	古市ゼミ
15 木	岩舘ゼミ・古市ゼミ まちラボP演習
16 金	甲斐田ゼミ・登丸ゼミ 千早高校見学 パンフレット撮影
17 土	
18 日	
19 月	古市ゼミ
20 火	地域ニーズの会
21 水	
22 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
23 金	甲斐田ゼミ・登丸ゼミ(クリスマス)
24 土	
25 日	
26 月	古市ゼミ
27 火	大掃除
28 水	
29 木	
30 金	
31 土	

コスメバンクプロジェクト

1月

1 日	
2 月	
3 火	
4 水	
5 木	
6 金	
7 土	
8 日	
9 月	
10 火	
11 水	
12 木	岩舘ゼミ まちラボP演習
13 金	大学入試 共通テスト準備
14 土	大学入試 共通テスト
15 日	大学入試 共通テスト
16 月	古市ゼミ
17 火	
18 水	岩舘ゼミ打合せ
19 木	まちラボP演習 最終報告会準備
20 金	登丸ゼミ 公野ゼミ
21 土	淑徳SC高校 ワークショップ
22 日	
23 月	ブランディング委員会動画撮影 地域ニーズの会
24 火	
25 水	
26 木	地域よりまちラボ使用 に関する打合せ
27 金	
28 土	
29 日	
30 月	岩崎まちラボP演習補習 女子栄養大 学長対談準備
31 火	女子栄養大 学長対談準備

2月

1 水	女子栄養大 学長対談 石村/統計学
2 木	
3 金	
4 土	
5 日	
6 月	石村/授業実験試作 フミコム打合せ
7 火	岩崎まちラボP 演習補習
8 水	
9 木	
10 金	島田プロジェクト まちラボP演習 児童館打合せ
11 土	
12 日	
13 月	
14 火	石村/授業内実験試作
15 水	Dラボ貸し出し機材確認 石村/授業内実験試作
16 木	キャリアセンターまちラボ使用に関する相談 戦略企画・IR推進室 撮影機材貸し出し
17 金	戦略企画・IR推進室 撮影機材貸し出し 入試広報C来年度企画打合せ
18 土	
19 日	
20 月	岩崎／まちラボプロジェクト演習映像上映会 地域ニーズの会 「大学生による地域活動」報告会・交流会打合せ
21 火	外国語学部 オンライン会議
22 水	石村/授業内実験試作 外国語学部関連打合せ
23 木	
24 金	経営学部打合せ
25 土	
26 日	
27 月	岩舘ゼミ打合せ
28 火	まちラボ「大学生による地域活動」報告会・交流会打合せ 石村/授業内実験試作

3月

1 水	
2 木	Dラボ撮影機材 貸出し
3 金	地域ニーズの会 ノベルティ完成
4 土	
5 日	
6 月	
7 火	Dラボ撮影機材 貸出し
8 水	
9 木	
10 金	「大学生による地域活動」 報告会・交流会資料完成
11 土	
12 日	
13 月	地域ニーズの会「大学生による地域活動」報告会・交流会打合せ
14 火	
15 水	
16 木	「大学生による地域活動」 報告会・交流会
17 金	
18 土	オープン キャンパス
19 日	
20 月	
21 火	
22 水	
23 木	
24 金	
25 土	
26 日	
27 月	
28 火	
29 水	
30 木	
31 金	まちラボ報告書発行

まちづくり研究センター　Social Design Center

文京学院大学まちづくり研究センター
報告書　2022 年度

発　行　日　2023 年 3 月 31 日

編集・発行　文京学院大学まちづくり研究センター

【まちラボ本郷】
〒 113-8668　東京都文京区向丘 1–19–1
TEL : 03-6240-0897　FAX : 03-6240-0898

【まちラボふじみ野】
〒 356-8533　埼玉県ふじみ野市亀久保 1196
TEL : 049-261-7859　FAX : 049-261-7864